

マルクス主義理論と「資本主義」の「比較」アプローチ

首都大学東京非常勤講師 稲葉年計

1 目的・方法

本報告は、日本を対象とするネオ・マルクス主義の歴史社会学・産業社会学として山田信行の研究を、また次いでマルクス主義国家理論としてヨアヒム・ヒルシュをとりあげ、そこから今日における歴史的・理論的な産業社会学および国家理論の展望と輪郭を描く。

山田は、主としてネオ・マルクス主義から端を発する歴史社会学において、前資本主義的諸関係に着目した産業社会学、労使関係論を構築している。土地所有者階級および商人資本家階級が資本家階級に移行した国民社会は前資本主義的諸関係（この場合温情主義など）を維持し、生産者階級が資本家階級となった国民社会は前資本主義的諸関係を短期的に払拭し、資本主義諸関係に移行しやすいとする。そこから山田は、資本主義発展の多元性を提示する。また、「国家—中心的アプローチ」を考察する上で開発国家を題材に分析する。くわえて、世界システムの理論をとり入れ、「ポスト新国際分業」の展望へと分析を進める。これはまた、内在的な歴史的制度論による産業社会学を企図するものといえる。このような試みにあえて描きにくい部分があるとみるならば、それはネオ・マルクス主義への批判と同様に対抗的な政治や行為あるいは制度変化・発展の部分である。ここにボブ・ジェソップのような抽象理論を避け、理論化を試みるものがヒルシュの理論である。

ヒルシュは、マルクスの唯物的国家理論を継承し、資本主義社会の「社会的形態」や「政治的形態」という枠組みとともに社会編成化の諸関係という視座を提示する。また、これにレギュラシオン理論を結びつけ、世界システム理論や従属理論とは異なった「個別国家ごとの、あるいは場合によれば地域ごとの蓄積 - 調整連関からなる可変的なネットワーク」としてのグローバルな資本主義システムの解釈を示し、またここにおいてもヘゲモニー論を結びつける。すなわち、「国家をめぐる闘争」であり、市民社会の「ブルジョア社会」としての一面を捉えつつ、「国家のラディカルな改造を含むあらたな調整様式をめぐるヘゲモニー獲得闘争」、すなわち、「政治」「経済」「社会」（「文化」）における国家単位の歴史や文化を意識した闘争と調整の戦略が重要となる。ただし、ヒルシュは世界システム論を採り入れながらも、星野智による「世界システムとしての資本主義世界経済の構造的な側面についての解明を理論的射程に入れていない」との批判もある。これは先の山田の研究にも当てはまる。

2 結果・結論

以上から、今日、ネオ・マルクス主義から出発する産業社会学や国家理論を俯瞰するにせよ、「資本主義」を「資本主義的なもの」としての「市場の論理」を内蔵しつつも、それだけでなく、経済・政治・社会の相互連関において「社会的なもの」をも捉えねばならないものとする「資本主義」の「比較」アプローチに開かれる。